

第10回

緩和ケア病棟にて
病気になっても病人にならない自由

前回（10月号）に続き、晴子さんと夫の物語です。
緩和ケアと精神腫瘍科に通院しながら自宅で過ごした日々の後に迎えた最期の日と、その後は？

*

緩和ケア病棟にはときどき入院して症状緩和をしていましたが、最後の入院は11日間でした。最期まで、光に向かって、お互い寂しいんじゃなく、明るく楽しくきれいに、って思っていました。

お風呂好きでしたから、お風呂付きの広いお部屋を頼んで、しょっちゅう入りました。家族がいる時間は看護師さんは遠慮してるけど、家族がいない時間は全てやってもらえるので安心でした。費用はかかりましたが、長期入院じゃないですからね。

リラックスできるいろいろな道具がそろっていて、自由に使えるように「足元を温めるものはここにあります」などと教えてもらえます。面会時間は自由で、友人が来てくれると、お部屋にソファがあってお茶も出せるので、好きなものを持ち込んでゆっくり食べたり話したりできて大事な時間でした。

おしゃれでしたから、クローゼットにいっぱい洋服を持ち込んで、毎日「今日は何着る？ この天気だからね〜」って話しながら好きな服を選んでました。亡くなる直前まで家族で伊豆に旅行し、1週間前には同窓会に参加し、3〜4日前にも花まつりを見に行っ。人によっては「そんな時期に遠くの同窓会に行くなんて」って反対する人もいます。前の日も散歩したんですよ。

当日の朝も看護師さんと「今日は出かけるよ」「奥さんがそろそろ来るから、着替えてからね」と話していたそうです。私は毎朝、仕事の前に6時半頃行きましたが、その朝は「そろそろ起きるかな」って思っていたらなかなか起きない。あれ？と気がついて、看護師さんに来てもらったら「会いた

い人に連絡して」ということでした。

ちょうど日曜日で、少し前に医師から「あと1週間くらい」と言われて子供、孫、めい、おい、親戚……会いたい人がみんなお見舞いの心づもりをしていたので、全員集合することができました。先生は「あと少しなら、みなさん揃うのを待ちましょう」と。夫は親戚を大事にして、集まりが大好きだったから、みんなのための一番いいこの日を選んだのかな、よかったと思いました。

*

緩和ケア病棟では、談話室でお茶の時間があり誘われましたが、行きませんでした。

人によって違うのですが、たまたま初めて会った人同士、それぞれ治療も暮らしも違って同じはずもないのに「大変ね、わたしも同じよ」なんて話を合わせるのはつらい。新しい関係をつくるには「こんなふうに言っているのかしら」って

気を遣わないといけないし。命に関わるほど具合が悪く心身が弱っている大切な時間に、初めての人と付き合ってもしょうがないという思いもありました。

夫が亡くなってしばらくして、看護師さんたちが寄せ書きを送ってくれました。こちらも何かお返事をと思うけれど、なかなか動き出せない。気がついたら出せないままになってしまったので、申し訳なくて……。業務上のマニュアルになっている手紙なのだろうな〜、でもみなさん一生懸命してくださったので、ほうっておくのもなんだな〜などいろいろ思うので、手紙は微妙ですね。

私は仕事をしているせいか、不思議なほど早く日が経ちますね。夫を喪^{うしな}ってぼ〜とした状態が続きましたがいま4年目で、やっと自分のためのご飯を炊いて、サラダを作ったり煮物をしたり。お供えしてから自分も食べるようになっていきます。自分のための料理が、復活のバロメーターでした。



さまざまな人生最後の光景
夫が好きだったお寿司。食が細くなってからも楽しめるように、極小サイズで握ってくれた。